

ジャグパル

JugPal

2005年10月2日 第30号



インタビュー

【ル・クプル・ノワール さん】

ジャグリング愛好家にも最近は“ヌーヴォー・シルク (新しいサーカス)”という言葉が知られるようになってきたのではないのでしょうか。

今回はこのヌーヴォー・シルクに魅せられ、欧州での取材、カンパニーの招聘、出版物の編集あるいはトークショーなどを通してヌーヴォー・シルクの普及活動をされている二人組「ル・クプル・ノワール」さんにお話をお伺いしました。

お二人の経歴は、ギャラリスト、カルチャー誌の編集者あるいはフリーランスライターとアートに関係したお仕事をされていましたが、まずはサーカスと全く縁もゆかりもなかった彼らとサーカスとの出会いから話を進めることとしましょう。



ル・クプル・ノワール のお二人

お二人のヌーヴォー・シルクとの出会いは一冊の雑誌でした。2001年10月、欧州で幾つかの国際芸術祭を取材するために渡仏したお二人は、情報収集の一環として買い求めた雑誌類の中の一冊に眼が釘付けになりました。

「何だろう、これ!？」……それはサーカスを特集したとある美術誌で、掲載された写真には今までつき合ってきた演劇とか舞踊などの舞台芸術とは異なる、サーカスの技芸をするアーティストたちが織りなす見たことのない世界が映し出されていました。

「写真を見ているだけでも惹き付けられ、それに面白いことに自分たちが関心を寄せる劇団がサーカスと融合したパフォーマンスを演じていることが分かり、サーカスにがぜん興味がわきました。」

最初に観たヌーヴォー・シルクはシルク・バロックの“トロイ”で、カンパニーには山内明美さんという日本人女性が参加していて、インタビューを兼ねての観劇でした。

「確かにショーは衝撃的ではあったけれど決定的ではありませんでした。つまり自分たちがこれからサーカスに関わって生きていこうと、このとき決心するまでには至りませんでした。」

Q: では、そのように決心させたものは何だったのでしょうか。

「あの日の情景は今でも鮮明に全て覚えています。人生の中でも異常に突起して覚えています。2002年3月2日の土曜日に観た二つのヌーヴォー・シルク、その日を境に人生は変わりました。そう、あれから身を捧げてサーカスを追い続ける決意をしたんです。ひとつはジェロム・トマの“シルク リリ”、そしてもうひとつが仏国立サーカス学校CNACのプロモーション“シルク13”でした。」



アミアン

Q: この二つの公演はどういった点がシルク・バロックと違っていたのでしょうか。言い換えれば何故シルク・バロックではそれほどまでの決意をさせることができなかったのでしょうか。

「確かにシルク・バロックの作品は、伝統サーカスしか知らなかった者にとっては演劇とサーカス技術のみごとな融合という点においては刺激的ではあったけれど、いま流行の言葉で言えば、『想定可能な』芸術でした。他方、“シルク・リリ”と“シルク13”はまったく想像を越えた舞台芸術作品で、言ってしまうと交換不能な作品だったのです。」

ところで、シルク13には金井圭介さんが出演していたり、衣裳担当は山本耀司さんであったりと、欧州のサーカスでは日本人が関わり活躍しているケースが多いのに、何故日本ではそれらが伝わってこないのかお二人は不思議に思ったそうです。そういった思いがヌーヴォー・シルクを紹介しようと決心させた伏線になっていたのかもしれない。

2002年4月に帰国してヌーヴォー・シルクを日本に紹介しようと活動を始めましたが、出版業界などをあたってみても、サーカスを取り上げてくれるところは無く、一時はあきらめて、何も自分たちが苦勞することはないし、好きな時に自分たちがフランスへ行ってみればいいのか、別に紹介する必要もないのでは、と思ったこともあったそうです。



シャロン (2005年6月現在工事中)

Q: では何が心変わりさせたのでしょうか？

「ひとつは、単純に誰かが呼んでくれるのを待っていても仕方がない。自分たちの好きなカンパニーは自分たちで呼ばばいいじゃんということです。とは言ってもそう簡単なことではないので、現在は関係者の協力の元、東京を中心に全国でヌーヴォー・シルクの作品上映会、報告会あるいはトークショーなどを開催していますし、ヌーヴォー・シルク公演のコーディネーターに協力することから始めています。例えば、今度札幌にヌーヴォー・シルクがやってくる。カアン・カアというフランスのカンパニーですが、グリム童話からヒントを得た作品『GRIMM』を上演し、我々も協力しています。

カアン・カアCahin-Caha『GRIMM』札幌公演(12月12, 13, 16, 17, 18日)

http://www.artpark.or.jp/main_right.html

そしてもうひとつは、自分たちは演劇やダンスや美術といったアートに携わってきたので、そういったアート側の人間とサーカスアーティストをつなげる役割を担いたい、そして担えるのではないかと考えたのです。

例えば金井圭介さんとは旧知の友人の如くお付き合いさせていただいていますが、彼は世界中を回っていて、今年の夏に帰国した際に8月23日から26日までの4日間、横浜で『金井圭介 マスクとマイムによる身体パフォーマンス ワークショップ』を企画・開催しました。

ジャグラー(目黒陽介)、ミュージシャン、美術家、ダンサーそして俳優……と実にさまざまなジャンルからの参加があり、そこには新しい出会いがあり、今までに経験したことが無いような場に立ち会うことができ、実際に参加者の間で斬新なコラボレーションが生まれたりもしました。」



ランス

お二人は異なったジャンル間でのコラボレーションの重要性を強調します。ヌーヴォー・シルクが成功した要因のひとつとして、ダンスなどとのコラボレーションがあったとも仰います。

「ジャグリングにしても異アートとのコラボレーションにより、ジャグラーが普段想像もつかないようなことが引き出されるのです。いろいろな才能を持った人との出会いがジャグリングをより創造的に発展させ、新たなアイデアが浮かぶきっかけとなるのではないのでしょうか。しかし残念なことに日本ではそういった環境が未だ整っていませんし、異なったアートとの出会いのきっかけが少ない状況です。そういったところでも自分たちが手伝っていければと思っています。」

Q: とところでフランスのジャグリングと日本のジャグリングとはどこが違うと思いますか。

「あちら(仏)は発想が豊かでイメージーションの持ち方が全然違いますね。例えばオブジェに対する接し方が違います。日本人ジャグラーは技術が高いけれどボールやクラブを神聖化しすぎるのではないのでしょうか、つまりこれらに頼りすぎているのではないかということです。

それとまだまだ競技指向が強いように感じます。欧州ではゴミ袋ですらオブジェとして扱い、そんなオブジェをいかに美しく見せ、空間を演出できるかなど模索しています。」



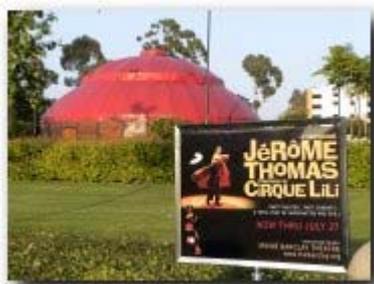
パリ

Q: それではフランスと日本の観客の違いというのは感じられますか。

「どんなアートでも言えることですが、積極的に観にいく姿勢がないとダメで、面白くないはずですが、でも日本ではどうしても自己規制しがちです。つまりこの分野は自分に関係あるけれど、これは関係ないといった枠組みに自分を入れてしまいがちです。最近は大道芸でごくごく自然に通行人が足を止めて見ていく光景が見受けられますが、他方劇場などに一步入るのをためらうといったことは往々にしてありがちです。もったいないことで、もっともっと自由に様々なアートに参加してもらいたいと思います。

そう考えると、フランスでは自己規制などしないし、言うなれば演じる方も観る方も作品を通して相互に対話を求めているかのように積極的に参加している姿勢が伺えます。対話と言えば、フランスでは公演が終わった後に、併設したバーで観客が直にアーティストと話せる場があり、それがごくごく普通であり当たり前に行われています。」

Q: お薦めのカンパニー(アーティスト)は誰でしょうか。言い換えると招聘したいカンパニー(アーティスト)は誰でしょうか。そしてその理由は、



カンパニー・ジェローム・トマによるシルク・リリのテント in L.A.

「ジェローム・トマです。繊細さと野蛮さを同時に兼ね備えた唯一のジャグラーだと思います。サーカスを愛するアーティストはたくさんいますが、彼はサーカスに愛されたアーティストです。彼の作品が日本で上演され、日本のジャグラーにどのような影響を与え、またどのような交通が生まれるのか、そのことを考えると楽しみで仕方ありません。」

文化・芸術をどうとらえて、その環境整備の重要性をどう認識するのか、フランスと日本を往き来して、両国の文化政策のあまりのギャップに戸惑いながらも、ル・クブル・ノワールのお二人はヌーヴォー・シルクの素晴らしさを伝えようとしています。

彼らを支えているものは何でしょうか。インタビューでのひと言が強く印象に残りました。

「自分たちが何故このような活動をしているか。自分たちはサーカスからエネルギーを与えてもらったので、今度はそのエネルギーを循環させたいのです。」

Le Couple Noir : Webサイト <<http://diary.jp.aol.com/da9ftyud/>>

メール <couplenoir@aol.com>

[安部 保範]



書籍紹介

[Street Arts and Circus Arts Festivals]

書名: Street Arts and Circus Arts Festivals

発行: HorsLesMurs Publication

価格: 10.00ユーロ

ページ数: 170

Webサイト: <http://www.horslesmurs.asso.fr/>

E-mail: info@www.horslesmurs.asso.fr

欧州におけるフェスティバルのディレクトリー。300以上のフェスティバルについて概要、日程、連絡先(電話、ファックス、メール)およびWebサイトURLが、フランス語、英語、スペイン語の3か国語併記で紹介されています。何月にどこでフェスティバルが開催されるかが分かるカレンダーや、欧州の地図上でフェスティバル開催箇所がマッピングされていたりと、なかなか楽しいガイドブックです。紹介されている国々は次の通り。ドイツ、オーストリア、ベルギー、デンマーク、スペイン、フィンランド、フランス、ギリシャ、ハンガリー、アイルランド、イタリア、リトアニア、ノルウェー、オランダ、ポーランド、ポルトガル、モナコ、ルーマニア、イギリス、スロヴェニア、スウェーデン、スイス

[Le GOLIATH]

書名: Le GOLIATH

発行: HorsLesMurs Publication

価格: 45.00ユーロ

ページ数: 687

Webサイト: <http://www.horslesmurs.asso.fr/>

E-mail: info@www.horslesmurs.asso.fr

フランスにおけるストリートアートやサーカスアートの概観が説明され、それらを生業としている300の団体や8,000ものパフォーマー個人に関する連絡先(電話、ファックス、メール)やWebサイトURLが掲載されているようです。国内のフェスティバルについてもたくさん同様に紹介してあるようです。“ようです”と言うのはフランス語のみで書かれてあるので、私には理解不能。即本棚行き。

[安部 保範]



Street Arts
and Circus Arts Festivals



Le GOLIATH

早めの編集後記

性懲りもなく50周年シリーズ(第3段)。「赤塚不二夫」がマンガ家になって50周年だそうです。数々の名作を世の中に出した彼ですが、私にとってのベストワンは躊躇無く「おそ松くん」。チビ太、イヤミ、デカパン、ハタ坊などの超個性脇役は今見ても色あせていません。小学生の頃、マンガ家はあこがれのスターだったし、マンガはたくさんの夢を見せてくれました。当時赤塚不二夫をはじめ石森章太郎、藤子不二雄、つのだじろう、森田拳次など売れっ子マンガ家にファンレターを出して(手塚治虫だけには恐れ多くて出せなかった)、昔は余裕があったのかほとんど直筆での返信をいただき、それらは今でも宝物です。

パフォーマーの皆さん、子供達に夢を与えられるような、あるいは子供達の記憶に残るような芸人になって下さいね。

ジャグパルは私という一個人が野次馬根性丸出して、単なる趣味として発行して、特定の企業、団体あるいはパフォーマー個人に関係しているものではありません。

編集発行人: 安部保範(神奈川県横浜市栄区 在住)

WebサイトJugPal

<<http://www.chansuke.net/jugpal/>>

見世物広場 <<http://www.chansuke.net/>>

E-mail: chansuke@chansuke.net



フェスティバル報告記

【EJCレポート】

2005年8月14日から1週間、EJC2005 in Ptujに参加してきました。

Location

今年の開催地はスロヴェニアというマイナーな国でした。多くの人が「ああ、チェコの隣でしょ」と勘違いするこの国は、実際はイタリアの左、オーストリアの南、クロアチアの西に位置し、実はヨーロッパのど真ん中にあたるのです。



プトウイの街

旧ユーゴで、これより東が東欧になります。ウィーン、パリ、モスクワなどから経路便がでていますが、日本からだと気が遠くなるような長旅です。

成田からパリ、12時間。その後なぜか空港に3時間とじこめられ(明け方で、警備員がなかなかドアを開けてくれませんでした)、苛立ちのままスロヴェニアのリュブリャナに向かいます。驚いたのですが、スロヴェニアに向かう飛行機には搭乗口というものがありません。空港からバスで飛行機の近くまで行き、その後みんなでぞろぞろと階段から飛行機に乗り込みます。飛行機も60席くらいしかありません。スチュワーデスも1人。救命胴衣の説明を必死にしていますが、誰一人として聞いてません。リュブリャナまでは2時間ほどのフライトで、空港から中心地までバスで1時間。我慢できずに車でジャグっている人を横目に、そこから目的地のPtuj(プトウイ)まで列車で3時間の旅です。列車に乗っていると、駅に着くごとにクラブをひっさげた人が乗ってきます。車内のジャグラー率はどんどん増えていきます。スロヴェニア人もさぞ驚いた事でしょう。

しかしプトウイは美しい町でした。まるで舞浜の鼠の国のようでした。いや、ほんとうに昔の町並みそのまま残っていて、中世ヨーロッパに来たようでした。僕が泊まったホテルのドアもなんと500年前からあるそうです。赤門や黒門が重要文化財になっている日本では考えられないことでしょう。

EJC site

EJCはキャンプ場を貸しきって行われました。サーカステントがいくつか張られていて、練習用のテントが1つ、ショーテントが2つ、他にバーやケバブしか売っていないレストランがありました。練習用体育館は1つ、キャンプ場から1km離れたところにあり、往復するのに一苦労です。晴れる日はみんな外で練習していますが、雨が降るとえらい事になります。キャンプ場のため、泥。せまい練習用テントの中は人がひしめいています。おまけにマリファナを吸っている人が多いので(ヨーロッパのジャグラーはヒッピーが多いのです)、テントの中は煙が充満しています。こりゃ体育館で練習するしかない。そう思って体育館までナメクジを踏んづけながら移動すると、人が満ぱい。一人半畳くらいのスペースしかありません。落としたボールを拾おうとすると一輪車が通過したり、左右前後からパスして取り損ねたクラブが飛んできたりとても練習にはならない有様です。

というわけで練習するには深夜に限ります。深夜は体育館がすいていて、しかも上手い人がぼりぼり練習しています。4ディアボロ4upピルエットの練習に勤しむトニーや、もはやよくわからないサイトスワップを練習するトーマス・ディッツが普通に横にいます。こういう人たちをビデオに収めようとする人も結構います。後でわかったのですが、深夜に練習する人たちは完全に昼夜を逆転した生活を送っていたようでした。夕方まで寝て毎晩のオープンショーを見た後に体育館で朝まで練習する。実に賢いやり方です。

キャンプ場では6、7日目に異臭が漂いはじめました。どうやら簡易トイレのあたりから臭いが湧き出しているようです。あれあれ雨はやんでいるはずなのにトイレの周りだけ湿っています。そういえば簡易トイレの排出物は誰がいつ処理しているのでしょうか。みんな口には出しませんがトイレの周りには近寄ろうとしません。どうやらこの臭い(中嶋さん曰く「スメリング」)は、EJCの名物らしいのでした。行きの電車で「EJCはたくさんの思い出ができる。Toiletteととかね...」と言っていたドイツ人の言葉の意味がやっとわかりました。子供たちが裸足で湿った泥地帯を駆け抜けていましたが、知らぬが仏でしょう。

Open Stage

EJCでなによりも幸せなのが、毎晩ショーがあることです。毎晩9時から始まる事になっている(9時に始まった事は一度もありませんが)オープンステージではアマチュアからプロまで様々なショーが見れます。トビーウォーカーやジェイギリガンなど有名どころも出ていました。ショーを毎晩見るとヨーロッパのジャグリング事情がわかります。ボールは特にきれいな動きと合わせてみせるスタイルが流行っているようです。バレエの基礎ができている人の動きは一見して違い、完成された芸術を見ているという印象を受けました。どうでもいいですが、ボールはボックスという技の変形が流行っているように見えます。3ボーラーはみんなやっていました。「ボックスはいいねえ。歯切りがある。」とドイツ人も興奮気味に話していました。クラブもただ投げるのではなく、体にはさんだり、スイングを取り入れたスタイルが人気ようです。5クラブでサイトスワップを入れる人も多くいました。ディアボロはみんな最後にhorizontalをやっていました。ディアボロが地面と平行になる技です。その状態でスティックリリースしてみんな大喜び。という感じのショーが多かったです。デビルスティックはもはや2デビルが標準なのか、というくらいみんな2デビルをやっていました。やはりジャグリングは日々進化していますね。とはいえジャグリングに他の分野(例えばマイムやアクロバット)などを取り入れたジャグラーや、フランスのシルクのような芸術性のあるジャグリングは少なく、やはりまだまだ技に固執しているジャグラーが多い印象がありました。

最後に

EJCはさすが世界一規模の大きなコンベンションだけあって、圧倒されます。ワークショップも毎日たくさんあり、街中をジャグリングしながらのパレードなどおもしろい企画もたくさんあります。夜になれば半裸の人々が光る道具やファイア系の道具をこぞってやりだし、みんな朝まで騒ぎます。移動はみんな一輪車です。

この本場のcrazyなジャグリングの雰囲気は日本では決して味わえないものだと思います。最終日、体育館で全裸で2デビルをやる男の姿が目撃されました。そう。彼はEJCの雰囲気に目覚めたのです。その後体育館の隅で恥ずかしそうに服を着出す彼の姿を見ながら僕は祭りのあとの寂しさを感じました。そう。楽しい楽しいコンベンションも明日になれば終わってしまうのだ。だからこそ、自分の心の中をすっきりさせたい。悔いの残らないようにしたい。やりのこしのないようにしたい。だからといって脱ぐのはどうかと思いますが、翌日自分の国に帰るジャグラー達はどこかみな寂しそうです。一年に一度だからこそ楽しい。一年に一度だからこそ馬鹿になれる。

みなさんも一度世界一大きくて、世界一crazyなコンベンション、EJCに参加して、捕まらない程度に馬鹿になってみてはいかがでしょうか？

[山積 隆之介 <rundy_in_france@yahoo.co.jp>]



ビッグトスアップ